Y07a　明治20年の皆既日食を撮影したと思われる写真の発見

大越　治（国立天文台）

明治20年（1887年）8月19日、新潟県から福島・茨城県にかけて皆既日食が見られた。この日食は近代になってから本州で初めて起きたもので、我が国の天文学者が初めて日食を科学的に観測し、政府（文部省）が一般市民に対して観測を奨励した日食としても知られている。日食当日は、皆既帯全域にわたって天候が思わしくなかった。そのため、新潟県三条で当時の内務省地理局観測隊の杉浦正治氏が撮影したコロナの写真は、世界的にも貴重な資料とされている。この日食の国内における観測に関しての調査は斉藤国治氏・篠沢志津代氏によって、東京天文台報に数回にわたって報告されている。この日食に関して新たな資料が見つかった。茨城県水戸市で撮影されたとみられる写真（紙焼きのプリント）である。撮影者は天文学者あるいはその指導を受けた観測隊員ではなく、町で開業している写真師であった。この写真ははたして本物であろうか。発見されたプリントを調べ、写真師を割り出し、当時の社会における写真の役割と技法を調べ、文部省の奨励によって残された数多くの一般市民のコロナスケッチ（国立天文台所蔵）と比較検討の結果、発見された写真の一部は実際に日食を撮影したものである可能性が高いことが分かった。本講演では発見の経緯から現在までに分かったことを報告する。